

## その2 標準台所への試みに対する問題点

阪市大生活科学 ○上林博雄 日本女大家政 沖田富美子

「目的」 住宅の設計計画学上、また住居管理学上、最も扱いにくい問題の一つは我国においては生活様式が未だ激しく変容しつつあるということである。特にこの問題は食生活とも関連する台所にはなほだしい。このような状況にあっても台所のハウジングミニマムの公準を追求することや、より良い台所を国民に提示してゆくことは緊要のことであろう。しかるに方法論的にこのような研究手法は必ずしも確立しているとは言えない。従って本小論では問題点を紹介して学的な批判をうることを目的としている。

「内容」 約15年を経た二つの調査論文において、前者では所有・使用状態より都市居住ホワイトカラー層を対象としていく分ストックに標準量を決定し、<sup>※</sup>後者では女子大生をもつ階層を対象として $\frac{1}{2}$ 所有の種目をとって標準量を決定した。<sup>※※</sup>これらの差異は標準に対する考え方、階層、年代等の差に支配されるであろう。また前者は標準量を取容するために品目別に容積算定を行い、後者は利用しやすいように全品目を収納する全収納部を提示した。これらについては、発表時スライドで図示する。

「問題点」 1、上述のような年代別の実態調査による以外に標準量を決定する手段・方法があるかどうか。2、標準量を決定する手順・方法として、所有・使用状態より如何なる指標を採って決定するのが合理的であるか。3、いずれも全標準量の種目が収納されるべきであるという前提にたつて収納空間を決定しているが、このような方針でよいのか。

注記：※ 上林博雄他4、台所標準化に関する基礎的研究、阪市大学部紀要14、1966。

※※ 沖田・上林、台所標準化へのアプローチ、阪市大生活科学部紀要27、1979。